



Title	壁面を彩る : タシケントのパネル式多層階集合住宅の装飾事例
Author(s)	鳳, 英里子
Description	ISBN: 9784938637491
Relation	共産圏の日常世界. 望月哲男編
Citation	スラブ・ユーラシア研究報告集, 1, 97-109
Issue Date	2008-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/47676
Type	departmental bulletin paper
File Information	SEP1_009.pdf



壁面を彩る

—— タシケントのパネル式多層階集合住宅の装飾事例 ——

鳳 英里子

1. はじめに

ウズベキスタン共和国首都タシケント⁽¹⁾は中央アジア最大規模の都市としてソ連邦期に活発な都市建設活動が行われた。タシケントに数多く現存するウズベキスタンの近代建築はソヴィエト建築が中央アジアの地域性と融合し、独自の展開を遂げた例として近年注目されているが⁽²⁾、その詳細や独自性を形成した各要因についての確かな分析は未だ行われていない。発表者は2006年にタシケントのソ連邦期に建設された多層階集合住宅の外観調査を行い、多様な伝統装飾のモチーフが壁面やファサード、ベランダの覆いに活用され、装飾技法も伝統装飾の技術を転用している点を確認した⁽³⁾。建築の表層を覆う伝統的な壁面装飾文化⁽⁴⁾はいかにソヴィエト・ウズベキスタン建築⁽⁵⁾に導入され、そこにはどのような取捨選択や変遷・変容が存在したのか。本発表では背景の要因として①ウズベキスタンの豊富な歴史建築資産と壁面装飾文化、及びそれらの調査研究や修復活動②ウズベク・ナショナル様式の形成と職人の登用の二点に着目し、集合住宅例を中心に概略を述べた後、タシケントのパネル式多層階集合住宅の装飾事例を、制作に関わった建築家N. ジャルスキー氏 (Н. Жарский) へのインタビュー成果を交え報告する。

2. ウズベキスタンの歴史建築資産と壁面装飾文化

2-1. 領域決定と歴史建築資産、および研究機関の整備

1924年のソヴィエト政権による民族・共和国境界画定でウズベキスタンは中央アジアの代表的歴史建造物が残る多数のオアシス都市を領域とし、他の中央アジア諸国と比べて抜き

-
- 1 1924年ウズベク・ソヴィエト社会主義共和国が成立（首都サマルカンド）。タシケントは1930年に首都となり、ソ連邦期にはモスクワ、レニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）、キエフに次ぐ第4の都市として発展。
 - 2 ウズベキスタンの近現代建築は日本でも近年注目が高まり、日本建築学会後援で2007年3月に建築会館・建築博物館ギャラリーで「ウズベキスタンの現代建築と世界遺産」展が開かれた。
 - 3 鳳英里子「タシケントの多層階集合住宅における壁面装飾の役割」2006年度日本建築学会大会、学術講演梗概集、2006年、429-425頁。
 - 4 中央アジアでは古来より外壁面、天井や内壁面を幾何学文様や植物文様等の装飾で覆う文化が発展した。本稿では以下「壁面装飾文化」と呼ぶ。
 - 5 ソ連邦期の1924-1991年にウズベキスタン領内で建設された建築物を指す。

ん出た数の遺跡、歴史建築資産を保有する事となった⁽⁶⁾。現在ウズベキスタン領内の5つの都市(ヒヴァ、ブハラ、シャフリサブス、サマルカンド)はUNESCO世界遺産リストに登録され、ウズベキスタン文化省歴史建造物保護管理局⁽⁷⁾には2500以上の歴史建造物および考古学遺跡が登録されている。これら豊富な歴史建築資産に対し、歴史・文化の保全を初期の頃から打ち出していたソ連邦は、歴史建築保護政策の一環として中央アジアの歴史建築の研究・修復活動拠点トルコムスタリサ(Туркомстарис)⁽⁸⁾を1921年に設立する。活発な修復活動は1920年代から職人と技術者により行われ、修復技術と方法論の蓄積⁽⁹⁾はソ連邦の中でも技術力の高い修復学派を形成するに至った⁽¹⁰⁾。1928年にはタシケントに芸術学研究所(Институт Искусствоведения)⁽¹¹⁾が設立され、中央アジアの遺跡および歴史建造物研究の学術センターとして活発な調査・研究活動が行われ、数多くの業績が出版されている。

2-2. 建築関連組織の整備

ソ連邦全体の計画経済の中、ウズベキスタンの主要産業となった綿花栽培推進のため、綿花栽培関連の農業施設やコルホーズ、タシケントやフェルガナの灌漑設備、電力発電所建設など大規模な土木・建設事業が1920年代前後から始まり⁽¹²⁾、それに伴い技術者養成の工科大学も設立される(1929年)⁽¹³⁾。地方の土地・水利建設活動の設備が進んだ後、1937年に

6 1971年にモスクワで出版された「中央アジアの歴史建築」では中央アジアを代表する9つの歴史都市が紹介され(ブハラ、サマルカンド、ヒヴァ、メルブ、クフナ・ウルゲンチ、シャフリサブス、ウズゲン、ナマンガン、タシケント)この内6つがウズベキスタン領内の都市である。Прибыткова А.М. Памятники архитектуры Средней Азии. М., 1971.

7 現在の正式名称は Madaniyat yodgorliklari Ilmiy ishlab-chiqarish Bosh boshqarmasi, O'zbekiston Respublikasi Madaniyat Ishlari Vazirligi.

8 正式名称は Туркистанский комитет по охране памятников страны, искусства и природы. 名称は後に Средазкомстарис、Узкомстарисへと変更。1920-25年に46箇所では歴史建造物調査と修復作業を行う。Захидов П.Ш. Полвека охраны и реставрации памятников культуры Узбекистана // АСУз. 1973. № 7. С. 4-7.

9 最初期の修復活動を通しザシプキン(Б.Н. Засыпкин)は中央アジアの歴史建築の修復技法と方法論の形成に努めた。1926年にモスクワで出版された論文集「修復問題」にも中央アジアの修復論を寄稿。Засыпкин Б.Н. Памятники архитектуры в Средней Азии и их реставрация // Вопросы реставрации. М., 1926. С. 137-178; Засыпкин Б.Н. Проблемы изучения и охраны памятников архитектуры Узбекистана во 2-й пятилетке. Ташкент, 1933.

10 鳳英里子「中央アジア歴史都市サマルカンドにおけるティムール朝建築の修復と活用の変遷」『日本建築学会計画系論文集』590号、2005年、167-172頁。

11 Пугаченкова Г.А. Вклад ученых Узбекистана в изучение архитектурного наследия республики // АСУз. 1973. № 7. С. 1-3.

12 ウズベク国家建設計画局のウズガスプロジェクト(Узгоспроект:正式名称は Узбекское государственное проектное бюро)は1928年に発足。

13 中央アジア綿花栽培・灌漑設備工科大学(среднеазиатский хлопково ирригационный политехнический институт)から中央アジア建設工科大学(среднеазиатский строительный институт)が新たに設立(1930年)。ウズベキスタンの建築大学および建築学派の詳細については以下の論考を参照。Бабиевский К.В., Убайдуллаев Х.М. Узбекская архитектурная школа // АСУз. 1979. № 12. С. 1-7.

都市・建築設計公団であるウズプランプロジェクト（Узпланпроект）⁽¹⁴⁾ と、タシケント建築都市計画管理局⁽¹⁵⁾ が発足した。その後 1960 年代には細分化が進み、都市建設公団⁽¹⁶⁾、大量生産型の集合住宅を専門とする住宅設計公団⁽¹⁷⁾、都市計画局⁽¹⁸⁾ が設置され、1970 年代には歴史建造物の修復と再開発計画を専門とする修復計画局⁽¹⁹⁾ がタシケントに設立された。ウズベキスタンの建築専門雑誌「ウズベキスタンの建設と建築」⁽²⁰⁾ には毎号、上述の建築関連組織によるプロジェクトの詳細や研究成果が掲載されている。

ソ連邦期のウズベキスタンでは全ての建設事業が国営の各建設機関に割り振られ、学術調査を基に実現が図られていた。モスクワを頂点とするソ連邦中央の指針に沿い進められた建設事業には、当時のソ連邦政策が色濃く反映されている。ソ連邦期のウズベキスタン建築界では、都市建設、建築設計、都市計画、歴史建造物の修復活動が 4 本の柱で、その中でも 1920 年代初期から行われた熱心な歴史建築の調査研究と保存修復活動は、遺跡や歴史建造物を数多く保有するウズベキスタン固有の特徴と言える。

2-3. 1930 年からの伝統回帰の風潮

スターリン期の 1930 年代半ば、対外緊張の影響から「ソヴィエト愛国主義」が強調され、その一環として革命前の古い伝統も政治的に利用可能な範囲で肯定的に評価する「伝統回帰の風潮」が現れる。これはウズベキスタンの歴史建築資産の調査・研究分野に大きな影響を及ぼした。諸民族の文化・伝統が肯定的に評価される過程で、大型の歴史建造物を始め、旧市街に残る 19 世紀、20 世紀建設の民家も調査・研究対象となる。地域の在来工法で建設された民家は人民（ナロード）の伝統的な生活文化を継承するものとして、ウズベク・ナロード建築（Узбекская Народная Архитектура）と呼ばれた。これは、ウズベキスタン領域内の都市に現存する在来工法の民家を指し、時の権力者により建設されたモニュメント的な歴史建造物とは区別され、A. ピサルチック（А. Писарчик）のサマルカンド民家調査（1938・41 年）や V. ヴァローニナ（В. Воронина）の民家研究に代表される⁽²¹⁾。

2-4. 伝統技術の再発見と実用への試み

人民の中から英雄を発見し、表彰する行為はソ連邦初期に盛んに行われ、伝統回帰の風潮の中、建築分野では装飾に携わるウスタ⁽²²⁾ が高く評価され、特に優れた伝統技術を受け継ぐ職人にはナロード・マスターの称号が与えられた⁽²³⁾。彼らは歴史建造物の修復で活躍し

14 正式名称は Узбекское государственное проектное бюро。

15 正式名称は архитектурно-планировочное управление Ташкента。

16 УзНИИПградостроительства の活動詳細は АСУз 1988 年 11 月号を参照。

17 ТашЗНИИЭП（1964 年設立）。活動の詳細は АСУз 1974 年 12 月号を参照。

18 ТашНИИПИгенплан（1969 年設立）。活動の詳細は АСУз 1989 年 9 月号を参照。

19 УзНИПИреставрации（1979 年設立）。活動の詳細は鳳 2004 年前掲で紹介。

20 Архитектура и строительства Узбекистана は 1960 年に創刊。本稿では АСУз と略す。

21 Писарчик А.К. Народная архитектура Самарканда XI-XX вв. Душанбе, 1974; Воронина В.Л. Народные традиции архитектуры Узбекистана. М., 1951.

22 熟練した職人の頭を指す名称。

23 ヒヴァのアブドゥウラ・バルタエフ（Абдулла Балтаев）、サマルカンドのミルハミド・ユヌソフ（Мирхамид Юнусов）他。

た後、ソヴィエト建築の装飾でも技能を発揮している。高名な職人はプハラのガンチ職人⁽²⁴⁾ シリン・ムラドフ (Ширин Мурадов)⁽²⁵⁾ で、中世の歴史建造物⁽²⁶⁾ の修復に携わった後、モスクワの展示会に出展されたウズベキスタンのパヴィリオン (1939年、後述) の装飾で名を高め、その後タシケントのナヴァイ劇場 (1943年) 他、大型建築の外観・内部装飾を担当した。シリン・ムラドフに代表される職人の登用で、1940年代以降、ウズベキスタンのソヴィエト建築には歴史建造物や伝統民家から採取された文様と装飾が施され、画一的なソヴィエト建築の表層が豊かに彩られた。壁面装飾の活用は、ソ連邦が各ナロードの伝統文化に深い理解を示し、各共和国は地域の伝統文化を保持して、固有の近代建築文化を発展させている、というアピールであり、地域性の象徴と捉える事ができる。ウズベキスタンでは歴史建造物や伝統民家に残る壁面装飾文化が「地域性の象徴」として抽出され、技術を保持するウスタ達はソヴィエト体制下で活躍の幅を広げ、近代建築に伝統装飾を施す、新たな試みを実践する英雄として賞賛を得た⁽²⁷⁾。この試みの初期段階でモスクワの展示会は大きな役割を果たし、その詳細を以下で述べたい。

2-5. ウズベキスタン・トルクメニスタン館



〔写真1〕1954年再建の全ソ連農業展示会
ウズベキスタン・パヴィリオン

1939年にモスクワで行われた全ソ連農業展示会 (Всесоюзная сельскохозяйственная выставка) 出展の仮設パヴィリオン「ウズベキスタン・トルクメニスタン館」〔写真1〕は後に「ウズベク・ナショナル様式」⁽²⁸⁾と総称されるソヴィエト建築とウズベキスタンの伝統的な壁面装飾文化の結合が大々的に行われ、モスクワで評価を確立した記念的建築と位置づけられる。

- 24 ガンチはムスリム圏一帯で用いられる漆喰の壁面装飾。半濁きの漆喰に彫刻し、文様を作成する。ウズベキスタンでは1930年代の伝統回帰以降、ガンチの職人技術は高く評価され、職人技術の現代建築への積極的活用、職人の表彰と技術継承、技法や作例の調査・研究が進められた。プラトフはガンチ技法の研究書を発表。Буратов С. Резьба по ганчу. Ташкент, 1990.
- 25 1943年にはソヴィエト・ウズベキスタン芸術家 (Искусств УзССР) ソヴィエト・ウズベキスタン学術アカデミー (Академии наук УзССР) の称号を得る。シリン・ムラドフ (1879-1957年) の伝統技術はノトキン (Н. Ноткин) から芸術学研究所の研究者により詳細に調査され、モノグラフが出版されている。Ноткин Н.Н. Бухарская резьба по ганчу в работах усто Ширина Мурадова. Ташкент, 1961.
- 26 サマニー廟、マゴキ・アタリ・モスク、ミール・アラブ・メドレセ他。
- 27 現在でもタシケントには名工シリン・ムラドフの名を冠した通りがある。
- 28 ウズベク・ナショナル様式については度々議論が行われている。Воронина В.Л. К проблеме национальной формы в архитектуре советского Узбекистана // Народные традиции архитекту-

白亜の列柱の柱頭や細部にはウズベク伝統の装飾文様が施され、ギリシア神殿風の大型展示室に取り囲まれて、中央には直径 10 m のヒヴァの伝統木造建築を模した星型平面のキオスクが設置された。伝統建築の形態を現代風にアレンジしたパヴィリオンは 1954 年に当初のデザインを引き継ぎ再建され、高い評価を得て数多くの建築関連雑誌に掲載された⁽²⁹⁾。設計を行った建築家 S. ポルパノフ (С. Полупанов)⁽³⁰⁾ は 1920 年代から 1930 年代初頭まで構成主義風の公共建築をウズベキスタンで多数建設していたが⁽³¹⁾、ここでは一転して古典主義の作風に転向している。また中央アジア伝統文様の装飾は上述の職人シリン・ムラドフが担当した。ソ連邦の中央モスクワでのパヴィリオン成功以降、伝統装飾の現代建築への活用は本格化し、タシケントでは同スタイルの大型建築が続々と建設された⁽³²⁾。同時に歴史建造物や伝統民家から、伝統的な意匠や文様を収集し調査・分析する研究がウズベキスタンでは盛んに行われるようになる。

2-6. 装飾の収集：その調査と研究の進展

ソヴィエト期最初の中央アジア建築調査は 1926-27 年にモスクワの東方文化博物館 (Музей восточных культур) 教授 В. デニケ (В.П. Денике) によるもので、成果は 1939 年に「中央アジアの建築オーナメント」と題し出版された。調査対象は古代から中世の歴史建造物の装飾で⁽³³⁾、モスクワの研究者が中央アジアで装飾を第一の研究対象と認識した点は興味深い。デニケの研究を引き継ぎ、タシケントの芸術学研究所教授 L. レンпель (Л.И. Ремпель) は 1961 年に中央アジア美術史・建築史の金字塔とも言える大著「ウズベキスタンの建築オーナメント⁽³⁴⁾」を出版し、遺跡発掘調査で発見された古代建築の壁面文様、中世の歴史建造物や近世の宗教施設、豪邸から採取された多種多様な素材・文様の分析を行った。この著作

ры Узбекистана. М., 1951. С. 115-127; Павлов А.И. К проблеме современной национальной архитектуры // АСУз. 1983. № 11. С. 11-17.

29 Arthur Voysce, "Soviet Art and Architecture: Recent Developments," *Annals of the American Academy of Political and Social Science* 303 (1956), pp. 104-115; Ремпель Л. Панджара: архитектурные решетки и их построение. Ташкент, 1957. С. 24-27.

30 ウズベク・ソヴィエト建築界の主要建築家 (1904-1957 年)。ウクライナ、ハリコフ出身。1930 年代初期は構成主義、1940 年代以降は新古典主義とウズベク伝統建築要素を折衷した建築を多数設計した。Кадырова Т.Ф., Аскарлов Ш.Д. Архитектор С.Н. Порупанов (1904-1957) // АСУз. 1973. № 12. С. 26-32.

31 アンディジャンの国立銀行 (Госбанк, 1928 年)、ウズベク・ソヴィエト議事堂 (Дом правительства УзССР, 1931 年) など。

32 ナヴォイ文学劇場 (1939 年)、ムキミ劇場 (1944 年)、ナヴォイ劇場 (1947 年) 等、タシケント・ホテル (1956 年)。1960 年代以降、ほぼ全ての大型建築で伝統文様のモチーフがファサードに使用された。例としてレーニン博物館 (1970 年)、ウズベク芸術家協会ホール (1974 年)、ウズベキスタン・ホテル (1974 年)、ゴーリキー劇場 (1977 年)、民族友好宮殿 (1981 年) など。

33 Денике В.П. Архитектурный орнамент Средней Азии. М., 1939. 章の構成は 1. レンガ・オーナメント 2. スタッコ彫刻 3. テラコッタ彫刻 4. 石版彫刻 5. タイル・デコレーション 6. 壁面碑文となっている。

34 Ремпель Л.И. Архитектурный орнамент Узбекистана: история развития и теория построения. Ташкент, 1961. 600 項に及ぶこの大著は、幾何学構成の分析、植物文様の採取、文様の作成方法から色彩論など項目は多岐に渡る。章立ては時代ごとの区分。

以降も建築の外壁および内部装飾の熱心な研究は続き⁽³⁵⁾、建築装飾の研究はウズベキスタン建築史、美術史の一角を担う重要な業績と言える。

ソ連邦全体に目を向けると、装飾研究は1930年代後半よりソ連邦各地域で非常に盛んに行われた⁽³⁶⁾。スターリンの様式主義の表層を覆うオーナメントとして、各国の伝統文様は好んで取り入れられ、中央アジア各地の遺跡から収集された文様や装飾をまとめた研究書は一種のパターン・ブックとして活用されていた。

3. タシケントにおける集合住宅の発展と装飾の役割

タシケントでは伝統的な住宅と居住形⁽³⁷⁾が残る旧市街の東側にロシア帝政期に新市街が建設され⁽³⁸⁾、ソヴィエト期にはそれら市街地の整備と拡張を含む都市建設が行われた⁽³⁹⁾。住宅供給はソ連邦期の最重要課題であり、特に実験的色合いの強い集合住宅は政策の変遷や技術の進展を反映し、ソ連邦期のウズベキスタン建築文化を辿る上での絶好のサンプルと考えられる。なお本発表では建築の表層を考察対象とするため、集合住宅のプランニング、配置、街区の構成については別の機会に改めて検討を行いたい。

3-1. 1930年代の初期集合住宅と装飾（初期）

1930年代前半にソ連中央のモスクワからタシケントに移植された集合住宅には構成主義と古典主義の二種が存在した。これらは政府職員や知識人専用の住宅で、広く一般に普及したわけではないが、集合住宅という概念自体が新しく、モスクワでも模索期・実験段階で、すでに中央アジアにも作例が造られていた点は興味深い。タシケントで実験段階の集合住宅を建設する意義は、社会主義という新社会の到来、住宅形態の進展を住民に直接アピールす

35 代表的な著作、ニルセン、マナコヴァによる「ウズベキスタン歴史建築の建築デコール」（1974年）では中世の歴史建造物のタイル装飾が、アズィモフによる「ウズベキスタンの文様画」（1987年）では木造建築の彩色天井画の文様が調査対象。*Нильсен В.А., Манакова В.Н. Архитектурный декор памятников Узбекистана. Ташкент, 1974; Азимов И. Росписи Узбекистана. Ташкент, 1987.*

36 *Алексеев С. Архитектурный орнамент. М., 1954.*

37 中央アジアには伝統的な中庭形式の住宅がマッハッラーと呼ばれる居住コミュニティを形成している。

38 ロシア帝政期の中央アジア都市建設は以下の文献に詳しい。**A. Pierce, *Russian Central Asia 1867-1917: A Study in Colonial Rule*** (University of California press, 1960). ロシア帝政期の都市・建築の研究を最初に行ったのはチャブロフ (G. N. Chabrov) で、その後ニルセン (V. A. Nil'sen) が研究を進め、タシケントの記述も詳しい。*Чабров Г.Н. Русские архитекторы дореволюционного Туркестана (1865-1916 гг.) // Архитектурное наследие Узбекистана. Ташкент, 1960. С. 221-249; Нильсен В.А. У истоков современного градостроительства Узбекистана: XIX - начало XX веков. Ташкент, 1988.*

39 ソヴィエト期のタシケント都市建設活動については多数の論考が発表されている。*Нильсен В.А., Зияев А.А. Основные формирования центра города Ташкента // АСУз. 1983. № 7. С. 10-14; Зияев А.А. Планировка и застройка Ташкента в первые послевоенные годы // АСУз. 1985. № 5. С. 7-12.*

る事であり、建設する事自体に意義があったと推測される。最初期の集合住宅は構成主義の作風で、装飾は排され、その後のスターリン様式主義の集合住宅では西欧古典の建築装飾が施され、広めのベランダ設置など平面の一部に気候・地域性への考慮を見ることが



〔写真2〕 タシケントのドム・コムーナ (1931年)

できる。
ドム・コムーナと構成主義：ソ連邦では1920年代初期からM. ギンズブルグら構成主義者により集合住宅の様々なプランニング、建築計画が行われ、タシケント中心街区にも1931年に集会所を含む政府職員用⁽⁴⁰⁾ドム・コムーナ⁽⁴¹⁾が設計された〔写真2〕(建築家S. ポルパノフ)。このドム・コムーナは構成主義⁽⁴²⁾の作風で、非対称のファサード、帯状のガラス窓、ピロティを特徴とし⁽⁴³⁾、シリンダー型の集会所にホテル・タイプ⁽⁴⁴⁾の住棟と共同食堂が隣接している。外壁は構造のコンクリートが剥き出しで、装飾を一切排除していた。翌年の1932年には建築家K. バビエフスキーにより、やはり構成主義の作風で曲線バルコニーを特徴とする3階建て集合住宅がプーシキン通りに完成する(1932年)⁽⁴⁵⁾。ファサードにはタイルの化粧仕上げが部分的に施され、バランスの取れた外観を構成し、現在まで集合住宅として使用されている。

上述二例の構成主義の集合住宅はタシケント中心地区の幹線道路が交差する角地に建設され、その特徴的な形体とファサードは社会主義と新しい生活様式、住居形体の到来を人々に印象付ける、いわばプロバガンダの役割を担っていたと推測される。

スターリン様式：タシケント中心の官庁区に隣接する公園の一角に二棟で建つ集合住宅はソ連邦期に優秀な科学者や人文学者が住んだ四層の特別住宅で⁽⁴⁶⁾(1936年建設、建築家A.

40 国家政治保安局ГПУ (Государственное политическое управление) の職員専用。

41 共同住宅(Дом-коммуна)は1918年のソ連邦第八回党大会で食堂・厨房の共同化、集会場、保育施設設置等の条件を含み綱領化され、1920年代後期にはソ連邦各地で実験的な要素の強い共同住宅が建設された。

42 1930年代初期のウズベキスタンではウクライナ、レニングラードで構成主義の手法を習得した若手建築家が多く活躍した(S. ポルパノフ、A. ペテリン(A.И. Петелин)、A. パブロフ(A.И. Павлов)、K. バビエフスキー(K.В. Бабиевский)など)彼らの多くは1930年代後半には新古典主義とウズベク・ナショナル様式を織り交ぜた折衷の手法へと転向する。

43 平面、構成、ファサード共にモスクワのドム・ナルコムフィン(設計M. ギンズブルグ、1930年)から影響を受けている。建物は南北軸に沿い、共同食堂、幼稚園、スポーツ場を含む区画全体が設計されたが、集合住宅、集会場、共同食堂のみ建設された(現存せず)。

44 ユニットごとにトイレ、バス、キッチンが備わる形式。

45 レンガ造。階段室の両側に3部屋から成る一戸が配置され、バスとトイレのみ各階共同で使用するプラン。現在も住居として良好な状態で使用。

46 ドム・スペツァリストフ(Дом специалистов)と呼ばれる。壁面にはこの住宅に住んだウズベキスタンの著名な作家や学者の記念板が嵌め込まれている。

パブロフ⁽⁴⁷⁾ 広めのテラスを備えた各戸は独立し⁽⁴⁸⁾ 当時の住宅の標準を越えた高級仕様であった。外観は1930年代半ばにソ連の承認様式となったスターリン様式⁽⁴⁹⁾で、巨大なコリント式柱頭を頂く古典様式の飾り柱が特徴的である⁽⁵⁰⁾。1930年代後半には同様の集合住宅がタシケントの中心街区に多数建設され⁽⁵¹⁾、特に幹線道路沿いの住宅は華々しいスターリン様式で装飾された。ここでの装飾は中央モスクワから移植された西欧古典様式の形式を保ち、地域の文様は取り入れられていない。

3-2. 1940年代大戦前後の集合住宅と装飾（中期）

スターリン様式の集合住宅建設が続く過程で、タシケントでは1940年代前半から中央アジア独自の伝統装飾モチーフを古典様式のファサード装飾の中に部分的に挿入する作例が登場し、それが1940年代、50年代ウズベク建築界の主流となる。この形式は古典様式の建築形式、装飾の基本は崩さず、パーツのみを地域の伝統建築要素に置き換えるという、西欧古典様式とウズベク伝統建築要素を折衷したファサードを生み出した。



〔写真 3, 4〕 ナヴァイ通り沿いの集合住宅（1943年）とファサード細部

場し、それが1940年代、50年代ウズベク建築界の主流となる。この形式は古典様式の建築形式、装飾の基本は崩さず、パーツのみを地域の伝統建築要素に置き換えるという、西欧古典様式とウズベク伝統建築要素を折衷したファサードを生み出した。

ウズベク伝統装飾：1930年代末からウズベク建築界で活躍した建築家 M. ブラトフ (M. Булатов)⁽⁵²⁾ は旧市街と新市街を結ぶナヴァイ通りの建設を進め⁽⁵³⁾、40年代には複数の集合

47 1905年ウクライナ出身の建築家。モスクワの芸術工科大学卒業後、タシケントで集合住宅、文化宮殿の建設を数多く手がける。代表作は鉄道員文化宮殿（1939年）。 *Орлова Е. Архитектор А.И. Павлов // АСУз. 1981. № 6. С. 36-39.*

48 各戸は3部屋と台所、バス、トイレを備え、当時の標準以上の広さと設備。

49 ソ連邦では1930年代から様式論争が本格化し、最終的にスターリンの支持を得た新古典主義が国家様式と認められ、古典主義を基礎に国家の威厳を強調した象徴性の強い建築が1930-1940年代に盛んに建設された。スターリン・アンピール様式（Сталинский ампир）もしくはスターリン様式と呼ばれる。

50 モスクワのL. ジョルトーフスキーによるA. パッラーディオの建築ファサードを模倣した集合住宅（1934年完成）と同様、巨大なコリント式付け柱が外壁に設置された。この住宅には元構成主義者であったA. パブロフの歴史様式主義への転向の軌跡を見ることができる。

51 いずれも内部は階段室を中心とした左右対称のプランで、広め的高级住宅。1937-9年には同様の住宅が Sh. ラティア (Ш. Рагия)、S. クチン (С. Кутин)、M. ベスプロズヴァニ (М. Беспрозванный)、A. ババハノフ (А. Бабанов)、Yu. スミルノフ (Ю. Смирнов) によりタシケント市内に設計、建設された。

52 1907年シベリア・トボリスク出身。レニングラードの建設工科大学を卒業しモスクワ都市計画に参加した後、1937年にタシケントのUzプランプロジェクトに入所。サマルカンド、フェルガナ、コーカンドのマスター・プラン製作で認められ、1940年にタシケントのチーフ・アーキテクトに就任。

住宅をこの通り沿いに設計した。集合住宅の住居部分の平面プランは1930年代の集合住宅と同様だが⁽⁵⁴⁾、外観ファサード装飾に明らかな違いが現れている。全体の建築構成は明らかに西欧の古典様式だが、細部にウズベキスタン独自の伝統装飾モチーフ、伝統建築要素を活用した。1943年のプラトフ作集合住宅〔写真3, 4〕では中央アジア特有の尖頭アーチを多用し、アーチ上部のスパンドレルには伝統的な漆喰装飾ガンチの巻き草文様を施している。尖頭アーチとスパンドレル装飾の組み合わせはウズベキスタンの伝統的な装飾構成で、歴史建造物や伝統民家ファサードや壁面装飾、工芸で頻繁に活用されている。またテラスの腰壁も同様にガンチの文様による透かし彫りを用いた。1946年のヴィラ形式住宅例ではテラスの構成自体は古典様式だが三連アーチは尖塔アーチで、スパンドレルやベランダの腰壁は伝統的な日差し避け格子のパンジャラ⁽⁵⁵⁾で構成されている。1949年の作例では尖塔アーチで統一され、柱頭部分に伝統文様が施されている他、テラス部分が持ち送りで立体的に飛び出し、特徴的なファサードを形成した。これらナヴァイ通り沿いの集合住宅群では、古典様式のファサードに、多種多様な伝統的装飾要素を如何に嵌め込むか、試行錯誤している様子が伺える。幾多の試みが行われている様子を、同時代の建築史家・批評家 V. ヴァロニナは伝統装飾の使用に統一感が無いと指摘し、成功した作例と失敗例があると批評している⁽⁵⁶⁾。

3-3. 1950年代以降の集合住宅（後期）

1950年代後半より住宅供給計画はソ連邦の国家プロジェクトとなり、世帯ごとのアパート供給が目標として掲げられた。同時にスターリン様式は「過度に飾られた英雄主義と壮大主義の産物」とフルシチョフに非難され（1954年）、経済性と機能性を追及し、装飾を一切省いたコンクリート・パネル工法の集合住宅が主流となる。タシケントでも人口増加⁽⁵⁷⁾に

以後、多数の都市整備プロジェクトを進め、代表作にコムサモール公園（1940年）、ナヴォイ通り（1940年代）、タシケント・ホテル（1956年）、パフタコール・スタジアム（1957年）など。中世歴史建築の研究にも熱心で1963年からは芸術学研究所に所属し、60余りの論考・著作を発表。歴史建築の幾何学分析（平面、ファサード構成の比率、アーチ形体の比較など）を行い、ティムール朝期ウルグ・ベク天文台復元案、サマニー廟の分析などを行う。代表的な研究書は *Булатов М. Геометрическая гармонизация в архитектуре Средней Азии IX-XV вв. М., 1973*; *Булатов М. Мовзолей Саманидов. Ташкент, 1976*; *Кадырба Т., Стринковский В. Жить, чтобы созидать. Ташкент, 1978*.

53 旧市街と新市街を連結する通りの拡張計画は1930年代初頭に作成され、プラトフはそれを引き継ぎ、通りの両脇に省庁、文化施設、大学等の大型公共建築と多層階集合住宅の配置計画を行い、自らウズベク農業省（1937年）、集合住宅群（1943-50年）を設計した。*Зияев. Планировка и застройка*（前註39参照）. С. 9.

54 何れも大通りに面した一層は店舗や事務所で、二層と三層部分が住居。階段室を中心に左右対称に住戸が配され、各戸が独立したバス、キッチンを備えている。また広間には夏の暑さ対策に広めのテラスが配されている。

55 強い日差しを和らげるため、主に窓の外側に設置された建具。木製、漆喰装、石製があり、幾何学文様や植物文様など多種多様な連続文様で構成されている。1940年代、芸術学研究所のウズベク・ナロード装飾文化研究の一環で L. レンペルにより調査・研究が進められた。*Ремпель. Панджара: архитектурные решетки и их построение*（前註29参照）.

56 *Воронина В.Л. op. cit., С. 137-139.????*

57 1959年の統計でタシケントの人口は91万2千人で近い将来に100万人を超えることが想定されていた。

対応した住宅供給計画が作成され（1962年）⁽⁵⁸⁾、9層又は4層の多層階集合住宅が並ぶ街区がパネル住宅建設専門の住宅建設コンビナート（Ташкентский домостроительный комбинат）により建設された⁽⁵⁹⁾。この時期パネル工法住宅の外観は極めて質素で、装飾は施されていない。

4. 1970年代以降のパネル工法多層階集合住宅の装飾

4-1. 華やかな装飾誕生の背景

1966年4月にタシケントは震災（M. 5.5）に見舞われ、大量の建物が崩壊し40万人が住居を失った。ソヴィエト全土から建設技術者と建設資材が派遣され⁽⁶⁰⁾、タシケント各地域に多様な平面やパネル工法の集合住宅を建設し、その多様な平面や配置から「ソヴィエト住宅建築の実験場」と呼ばれる⁽⁶¹⁾。この時期、タシケントでは復興プログラムにより多数のコンクリート造、パネル製の高層大型建築が次々と建設され、装飾素材も鉄やアルミ、石やモザイク・タイルと多様化した。産業化、大型化の過程で建築装飾はウスタラ職人の守備範囲を超え、建築家や工業デザイナーらの手に移行する。しかし伝統民家や歴史建造物の装飾要素を現代建築に活用する方針は続き、新素材、新工法を用いて様々な融合の試みが行われた⁽⁶²⁾。当時の建築批評家ザヒドフは「ウズベク・ナロード建築の装飾技術と色彩を受け継いだ芸術性の高いウズベク現代建築」と賞賛し⁽⁶³⁾、一方レンペルは「歴史建造物の青ドームやアラベスクをコンクリートで即物的に作るのではなく、伝統建築装飾に宿る芸術美こそ継承すべき」と伝統建築のフォルムや装飾の安易な活用を批判している⁽⁶⁴⁾。

伝統装飾活用の試みはパネル式多層階集合住宅でも行われ、タシケントには色鮮やかな装飾で覆われたパネル式集合住宅が登場する。建築家スタリツェヴァは1974年の論考でこれら集合住宅を「新しい社会主義都市に相応しく伝統建築の優れた装飾性を備えた大型集合住宅」と紹介し⁽⁶⁵⁾、タシケントの建築家マナコヴァは色彩学の立場から、明るい色彩や文様

58 この住宅供給計画では50%が4層、43%が9層で1～2階建てはわずか7%である。T. F. Kadirova, *Architecture of the Soviet Uzbekistan* (Moscow, 1987), p. 91.

59 1960年代初頭の代表的な住宅地区としてChilanzar地区が挙げられる。

60 震災後の復興作業により都市の人口は200万に膨れ、20年間で延べ900万㎡の建設が行われた。異例の速さで進められた復興は友好に基づく「モデル都市」として広く喧伝された。復興期の建設記録は以下の文献に詳しい。Абдурахманов Р.Р. Народы СССР-Ташкенту (Братская помощь народов СССР в ликвидации последствий землетрясения в Ташкенте) // Сборник документов 1966-69 гг. Ташкент, 1970.

61 P. Meuser, “The Aesthetics of the Plattenbau,” *Project Russia* 25 (2003), pp. 73-79.

62 タシケントにこの時期建設された大型建築で、伝統装飾要素をファサードに活用している例としては、レーニン博物館（1970年）、ウズベキスタン・ホテル（1974年）、ウズベク芸術家協会（1974年）が挙げられる。

63 Захидов П.Ш. Важные компоненты стиля архитектуры // АСУз. 1978. № 3. С. 21-26.

64 Ремпель Л.И. Сущность новой архитектуры Ташкента // АСУз. 1972. № 3. С. 29-30.

65 Суздальцева А. Масштабность и архитектурная выразительность крупнопанельного строительства // АСУз. 1974. № 3. С. 31-34.

に覆われた多層階集合住宅を地域の伝統や風土にも適合した例として賞賛している⁽⁶⁶⁾。

4-2. 装飾箇所とその特性

装飾は1973年以降にタシケント住宅設計公団（ТашЗНИИЭП）が建設した9層のパネル工法住宅に集中している。この集合住宅では壁面全体やファサードの一面を装飾文様で覆いつくす、すなわち伝統的な壁面装飾文化そのものが活用され、大量生産型で箱型の単調なパネル式住宅の表層を豊に彩った。タシケントの住宅コンビナートではパネル式住宅の壁面装飾が専門のエンジニア兼デザイナーが技法や文様を考案・制作した。代表的なデザイナーとしてジャルスキー3兄弟（П. Жарский, Н. Жарский, А. Жарский）の名が挙げられる⁽⁶⁷⁾。パネル工法住宅の装飾箇所に着目すると以下の二種に分類される。

①**テラス・ファサード**：夏の期間が長く、高温乾燥型のタシケントの気候対処として、パネル工法の集合住宅では幅2m以上のテラスが設置され、屋内に差し込む日差しを和らげる目的で日避け（Солнцезащита）が住宅コンビナートの技術者達により考案された。幅広のテラスを覆う日避けは、中央アジアで伝統的なパンジャラの文様を踏襲し、星型や幾何学文様、あるいは曲線で構成されている。各戸の日避けが全戸で連続文様を織り成す様子は、パネル工法式パンジャラと呼ぶに相応しい。現在テラスの多くが住まい手により改造され屋内空間へと変質し、日避けも多くが改築され、パネル工方式パンジャラの著しい変容が進んでいる。

②**側壁ファサード**：長方形体の側壁面全体、もしくは側壁面の上部に装飾もしくは図柄が施された例。パネル住宅の側壁は凹凸がなく、9層分の側壁は巨大壁面画の構成に適している。集合住宅の大壁面はソ連邦のスローガン提示に格好の場であり、街の広告・宣伝装置として機能し、華やかな装飾を備えた側壁ファサードの多くはタシケント市内の大通り沿い、もしくは市外から市内に入る幹線道路沿いに設置された。側壁ファサードは両側面で同一もしくは異なる図柄が施され、図柄および装飾技法ともにウズベキスタンの歴史建造物や伝統民家の壁面装飾文化からの影響が強く、地域性を演出する装置と位置づける事ができる。以下、技法と図柄の分類を行う。

4-3. 側壁ファサードの装飾技法

側壁全体を覆う壁面画もしくは文様の図柄はウズベキスタンで伝統的な建築技法であるモザイク・タイルと押し型の二種が存在する。

モザイク・タイル技法：細かく切断したタイルで文様が構成され、平面的で壁面の要素が強く、中世の歴史建造物の外壁装飾で頻繁に使用されている。ウズベキスタンでは歴史建造物の修復用タイルの開発が1950年代から進み⁽⁶⁸⁾、蓄積の厚いタイル研究の成果を生かした、夏の

66 Манакова В.Н. Художественно-колористическое решение жилой застройки Ташкента // АСУз. 1984. № 2. С. 17-23.

67 彼らの活動については以下の論考で紹介されている。Мирошниченко Ю.Г. Монументальное искусство и архитектура жилья в творчестве Петра: Николая и Александра Жарских // АСУз. 1987. № 7. С. 16-23.

68 Гражданкина Н.С., Рахимов М.К., Плетнев И.Е. Архитектурная Керамика Узбекистана. Ташкент, 1968.



〔写真 5〕 押し型技法のパネル装飾例

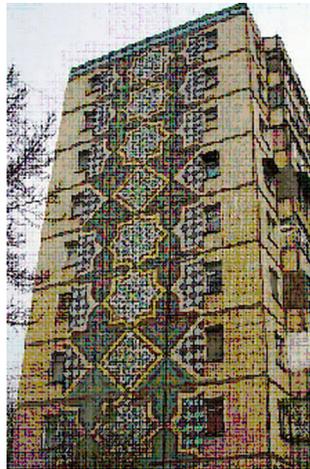
強い日差しにも剥落しない特別タイルが住宅コンビナートの工場生産されていた⁽⁶⁹⁾。建設後 40 年を経た現在でもタイルは剥落せず、建設当初の鮮やかな色彩を保つ。歴史建造物と同様、パネル式集合住宅の壁面でも青色が使用される頻度が高く、これは焼成温度と経費削減の影響もあった⁽⁷⁰⁾。

押し型技法：表面に凹凸柄が付いた白地パネルを連続して並べる事で、壁面全体に文様が造り出される〔写真 5〕。

押し型式の装飾パネルの文様は、中世の歴史建造物の浮き彫りタイル装飾と酷似している⁽⁷¹⁾。両技法ともいわば伝統なタイル装飾技法をコンクリート・パネルに応用した例だが、これら技法を使い描かれた連続文様を含む図柄は、伝統文様の影響を強く受けている例から、ソビエトや産業のシンボル、またデザイナーが独自に考案した幾何学形など多岐に渡る。

4.4. 側壁ファサードの図柄

2006 年の調査⁽⁷²⁾を基に図柄の分類を行うと以下 A～D となる。



〔写真 6, 7, 8〕 パネル住宅の側壁ファサード装飾例

69 住宅コンビナートでパネル壁画の作成に携わった N. ジャルスキー氏へのインタビュー（2007 年）からの情報。

70 青色は低い温度で焼成され、一方赤色は高い温度を必要とするため経費が高く、経費削減の点からも青色系を好む傾向にあった。N. ジャルスキー氏へのインタビュー（2007 年）からの情報。

71 サマルカンドにティムール朝期（14 世紀末～15 世紀）建設されたシャーヒ・ジнда廟群では浮き彫り技法による精巧なタイル装飾を見ることができる。

72 筆者は 2006 年 3 - 4 月に Nabi Utarvekov 氏（Media Land, Tashkent）氏と共にタシケント市内の多層階集合住宅の実例を 50 件採取した。調査の内容は主に写真撮影と調査ノートへの記入、住所の確認と既往出版物からの設計者、建設年代の特定と平面・断面図の採取である。

A 伝統関連：歴史建造物や伝統民家から採取されたガンチやタイル、壁画による幾何学文様や植物系文様、中央アジア伝統の織物アトラスを基にデザインしたもの〔写真6〕。中世イスラムの天文学者やアストロラーベ（天体観測機）など、イスラムの伝統に関連した図柄を含み、ウズベキスタンの地域性と直結している図柄。

B 産業関連：ソ連邦期の計画経済によりウズベキスタンの主要農産物となった綿花、タシケントで製造されていた航空機や飛行船、宇宙飛行士など産業の発展を賞賛する図柄。多くの作例でAの伝統関連の文様と組み合わせて作図されている。

C イデオロギー関連：ソ連のシンボル鎌と槌、平和の象徴である鳩や、力強さの象徴である鷲が効果的にデザインされた図柄〔写真7〕。

D その他：伝統文様や何らかのモチーフとも関連せず、純粋に幾何学形態で構成された図柄〔写真8〕。

収集した全50例の側壁ファサードの内、38例が伝統に関連する図柄で、タシケント市内にウズベキスタンの地域性や伝統と関連の強い文様や図柄を意図的に配置していた事が分かる。産業やイデオロギー関連の図柄でも、青を基調とした色彩や連続する幾何学文様が背景に使用され、ウズベキスタンの地域性や伝統という要素が図柄に組み込まれていた。

5. まとめ

ウズベク・ナショナル様式の形成期（1930年代後半～1940年代）、壁面装飾文化は地域性を表現する用途で活用され、技術を保持するウスタ達はスターリン期の古典主義建築の表層に伝統装飾を施し賞賛を得た。1954年以降の工業化推進、経済性・機能性重視の時代に建築装飾は一旦影をひそめるが、タシケントでは1960年代後半から現代ソヴィエト建築のフォルムに歴史建築要素や伝統装飾モチーフが組み合わせられるようになる。建築の用途や規模、工法や素材が急速に変化する過程で、装飾の担い手はウスタからコンビナート技術者の手に移り、同時に装飾自体も技術者達が歴史建築の「要素」や伝統装飾の「モチーフ」を抽出し、独自のデザイン・センスと組み合わせた物へと変容している。1970年以降のタシケントに登場するパネル式多層階集合住宅の装飾例は、ウズベキスタンの壁面装飾文化が住宅の外観で大々的に活用された実例であり、また官僚主義管理下の建設事業の中で、個人の創造性が一定の制約を受けつつも発揮された具体例と捉えることができよう。

謝辞

調査はタシケント Media Land の Nabi Utarbekov 氏の協力で行われ、ウズベキスタン芸術科学研究所（Fine Arts Scientific Research Institute of Uzbekistan）の Abdumannop Ziyayev 教授には資料収集の際大変お世話になった。記して感謝申し上げる。本稿は日本学術振興会特別研究員奨励費による調査・研究成果の一部である。

写真出典

写真1：Кадырова Т.Ф., Аскарлов Ш.Д. Архитектор С.Н. Порупанов (1904-1957) // АСУЗ. 1973. № 12. С. 30.

写真2：Media Land Archive, Tashkent, Uzbekistan, 2006.

写真3～8：筆者撮影（2006年）。